

## 唱歌誕生—ふるさとを創った男—

猪瀬直樹著

文藝春秋 1994（文春文庫）

法学部准教授 坂詰 智美

高等学校までにさまざまな授業を受けてきたなかで、教科書が占める割合は高かったと思いませんか？

明治時代の早い段階で近代教育システムが構築されましたが、当初は教科書についてはゆるやかな扱いをしていました。時代が下がるにつれ、教科書について様々な制約ができ、政府の意向が通りやすいように変わっていきます。教科書のしくみが大きく変わったのは、日清戦争と日露戦争にはさまれた1901年のことで、それまでの「検定制」（現在のしくみとは少し違いますが、呼び名は同じ）から「国定制」となりました。「国定制」は6次の改訂を経ながら、太平洋戦争終結まで存続しました。

はじめて「国定」の教科書として作られたのは、小学1年生用の国語だったようですが、この教科



書を作ったメンバーとして活躍したひとりに、高野辰之がいます。

高野辰之、聞いたことはありませんか？「ふるさと」や「朧月夜」などの名曲の作詞者です。昔は文部省唱歌として作詞者や作曲者は公表されな

かったのですが、最近ではきちんと名が載せられるようになりました。高野は文部省の技官として教科書に携わる多くの仕事をなした人物ですが、その他に多くの学校の校歌の作詞をしたことでも知られています。作詞した学校は100校を超えるのですが、そのうちの1つが専修大学の校歌です。

入学式で校歌を聞いたと思いますが、難しい言葉が多いと思った人もいるかもしれません。校歌は学校の成り立ちや理念を表すもので、作られた当時の大学の在り方が如実に示されています。

本書は、高野とその周辺の人々の生き様が描かれており、近代社会が形成されていくありさまが実感できるものです。専修大学ができ、校歌ができた時代を感じてほしいものです。そして、この本を通して、大学の校歌を作詞した人・高野辰之の生き様を、感じていただけたらと思います。

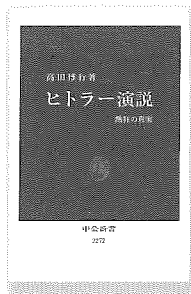
## ヒトラー演説—熱狂の真実—

高田博行著

中央公論新社 2014（中公新書）

経営学部教授 大柳 康司

2015年は第二次世界大戦終結後70年を迎える節目であったことから、先の大戦に関する多くの報道や特集番組が生まれ、改めて戦争の悲惨さを痛感することができた。そのなかでも、ドイツのヒトラーの演説シーンを目にすることが多かったように感じられる。特に手振りを交え、聴衆に訴えかけるその姿は、誰しもが一度はテレビ等で見た記憶があると思われる。今を生きている私たち



にとって、当時のドイツ国民がなぜヒトラーに熱狂したのかは、体感できるすべもない。それゆえに、私たちは二度と同じことを起こさないためにも、なぜこのようなことになったのかを記した著書を読むべきである。

多くの著書の中でも、本書はヒトラーが政界に登場し、ドイツの敗戦までの25年間に行われたヒトラーの演説を分析したものである。ヒトラーに関する著書は、非常に多くのものであるものの、演説に着目し、それを言語学的に分析した点は非常に興味深いものである。過去の悲劇がなぜ生じたのかを理解し、客観的かつ冷静な観点を育むべく、本書をぜひ読んでもらいたい。